研究ノート

中学生の生活実態と自己肯定感に関する基礎的分析

A Basic Analysis on Lifestyle and Self-Esteem of junior High School Students

栗田克実
Katsumi KURITA
旭川大学保健福祉学部

キーワード：自己肯定感，文化資本，社会関係資本

抄　録

本研究の目的は，中学生の自己肯定感について，文化資本・社会関係資本を含む家庭生活・学校生活との関連において，その規定要因を明らかにすることである。中学生 374 名を対象に無記名自記式による質問紙調査を実施した。中学生の家庭での生活，学校での生活，自己肯定感などを網羅的にたずねた。回答は 208 名から得ることができた。これらの回答のうち，まず自己肯定感に関する質問群について因子分析を行い，自己肯定感尺度を生成した。そして，これを従属変数とする重回帰分析を行ったところ，学校の成績の主観的評価，友人との関係，性格のことについての悩みの有無，自分の家では食事を大切に考えていることが有意に関連していた。また，相談相手が母であること，家族で社会の出来事について話すことについては有意な傾向が認められた。本研究の結果から，中学生の自己肯定感は，学力の主観的評価，食習慣や家族や友人との信頼関係など中学生自身が持つ文化資本や社会関係資本によって規定されると考えられた。

Ⅰ．問 題 の 所 在

近年，日本では，子どもの「非認知能力」の重要性が指摘されている。非認知能力とは，その定義について，まだ十分な整理がなされているとは言い難いが，主に「自己肯定感，自己有用感，自制心，協調性，モチベーション」などをさし，学力テスト等で測定可能な認知能力の対概念であるといえる[1]。この非認知能力は，多くの海外研究によって，子どもの社会的不利，貧困の世代的再生産を断ち切る重要な概念として取り上げられてきた。

そもそも自己肯定感とは「自尊感情」「自尊心」「自己効力感」などの語も用いられており，曖昧な概念である。多くの研究を俯瞰して，「自らの価値や存在意義を積極的に評価・肯定できる感情」と言ってよいだろう。しかしながら，「現代の子どもたちの育つ環境が，子どもの心の居場所になり得ていないということが，自尊感情の低下につながっている」との指摘があるとおり，日本の子どもの自己肯定感は低いことが多くの研究結果によって明らかにされている[2]。

日本の子どもの自己肯定感の現状について見ておこう。まず「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査（平成 25 年度）」では，日本の若者のうち，自分に満足している割合は 45.8％，自分には長所があると思っている割合は 68.9％にとどまっており，他国と比較しても日本が最も低い[3]。また，国立青少年教育振興機構が実施した「高校生の生活と意識に関する調査」では，「自分はダメな人間だと思うことがある」という質問で日本は 72.5％が「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答し，中国（56.4％），米国（45.1％），韓国

（35.2％）に比べ，高い割合を示した[4]。これらの結果をうけて，松井（2017）は，「日本の子どもの自己肯定感は諸外国に比べて著しく低いため，教育等を通して自己肯定感を高めることが何よりも重要な課題」であると指摘している[5]。

自己肯定感を規定する要因に関する研究は増えてきた。阿部（2015）は，低所得層と中高所得層の自己肯定感格差の存在を明らかにした[6]。

また，郭・田中・任・史（2018）は，子どもの自己肯定感に及ぼす要因について明らかにしたうえで，それらの要因の自己肯定感への影響の程度について，特に関係的要因に焦点をあてて，実証的に検証した[7]。関係性を考える際，親・教師との関係だけではなく，学校生活・友人との関係も含めて，広く「人」との関係を分析することにより子どもの自己肯定感にどのような影響が出ているか，重回帰分析を行った結果，「親・親戚との関係」「学校での生活」「友人の有無」のいずれもが自己肯定感に影響していることが明らかになった[8]。しかし，子どもの自己肯定感について，文化資本や社会関係資本を意識し網羅的な分析を行っている研究は近年見当たらない。

本研究は，中学生の自己肯定感について，文化資本・社会関係資本を含む家庭生活・学校生活との関連において，その規定要因を明らかにすることを試みる。

Ⅱ．方　　法

1．対象と調査方法

調査は，A 町に在住する児童（小学 4 年～中学 3 年）とその保護者を対象とし，「子ども」「保護者（父親）」「保護者（母親）」の 3 種類を用意し 2015 年 8 月に実施した。

本研究における調査票は無記名自記式とし，教育委員会から世帯単位で送付し，回答票を封入・厳封したものを児童・生徒を通して学校に持参してもらった。

このうち，本研究では A 町内の中学生を対象に分析を行った。

2．調査項目

家庭生活のうち，食事に関する調査項目は，ベネッセ教育研究開発センターが実施した「第 2 回子ども生活実態基本調査」における当該調査項目を，また，文化資本に関する調査項目は，JELS（2003）で実施された調査項目を使用した[9][10]。そして，学校生活に関する調査項目は，内閣府（2007）が実施した「低年齢少年の生活と意識に関する調査」で用いられた調査項目を使用した[11]。

自己肯定感に関する項目は，多くの研究者によって測定項目が開発されているが，ローゼンバークの項目を意識しており，かつ児童生徒の回答しやすさを考慮し，岩永・柏木・芝山・藤岡・橋本（2013）が作成した「自己肯定意識尺度（4 件法･8 問）」を使用した[12]。

このほか，悩みごと，悩みごとの相談相手について尋ねる調査項目を設定した。

調査票は，事前に A 町教育委員会および調査対象学校長と検討を行い，調査票内の表現について必要な修正を行った。

3．倫理的配慮

調査における倫理的配慮としては，実施段階において，対象者の自由意志に基づいて諾否が決定できるよう配慮した。本調査は無記名自記式の質問紙調査であるので，調査に対する承諾は，対象者への協力依頼書面により内容の説明を行ったうえで，質問紙に回答し返却した段階で得られたと考えた。

4．統計解析

中学生の自己肯定感と生活状況との関連性を検討するため，後述する自己肯定感得点を従属変数として，文化資本・社会関係資本を含む生活状況・基本属性を独立変数として，これらの関係性について統計学的に分析した。具体的には，生活状況･基本属性において，２群の自己肯定感得点の比較については，対応のない t 検定，3 群以上の自己肯定感得点の比較については一元配置分散分析，連続変数と自己肯定感得点との関連については spearman の順位相関係数を用いて，単変量解析での関連性を検討した。

次に，単変量解析において 5％未満の確率で自己肯定感得点との関連性が認められた変数を独立変数とし，自己肯定感得点を従属変数とする重回帰分析を行い，自己肯定感得点に関連する因子を抽出した。なお，重回帰分析では，回帰式のあてはまりの良さを示す指標として，自由度調整済み決定係数（R^2）をあわせて算出した。

統計学的検定における有意水準は 5％とした。なお，重回帰分析に限り 10％未満を傾向ありとした。

分析には SPSS Statistics（ver.25）を使用した。

Ⅲ．結　　果

本調査の回答は 210 名から得られた（配付数 374，回収率 56.1%）。回答者の基本属性に関するデータを表１に示した。

自己肯定感に関する８つの設問群に対して，尺度を生成するため，主因子法による因子分析を行った。固有値の減衰状況（3.944，1.072，0.834，0.577...）を考慮し，因子数については１とした（表２）。

この自己肯定感尺度を作成するにあたり，尺度の内的整合性を検討するため，クロンバックのα係数を算出したところ 0.851 であり，利用するに十分な値であると判断した。本研究では，これら８項目の得点を加算したものを尺度得点（自己肯定感得点：8 － 32 点）とした。回答者全体の平均は 24.080±4.970 点であった。学年及び性別の自己肯定感尺度を表３に示す。

次に，自己肯定感得点を従属変数として，また単変量解析において５%未満の確率で自己肯定感得点との関連性が認められた変数を独立変数とする重回帰分析を行った。VIF（Variance Inflation Factor）はすべて 1.6 以下であり，変数間に多重共線性の問題がないことが確認できた。標準偏回帰係数（β）に有意な差が認められた項目は，係数の大きさの順に「学校の勉強ができるほうか」（$p < 0.001$），「友だちとの関係がうまくいっている」（$p < 0.001$），「性格のこと（で悩んでいる）」（$p < 0.001$），「自分の家では食事を大切に考えて」（$p < 0.05$）であった。また，「悩みや心配を相談する相手が「母」」（$p < 0.10$），「家族で社会の出来事につ

表１　回答者の基本属性

		回答者数	%	
性別	男	87	41.4	
	女	123	58.6	
学年	１年	62	29.5	
	２年	78	37.1	
	３年	70	33.3	
きょうだい	いる	179	85.6	
	いない	30	14.4	N. A.= 1
家族構成	二親世帯	174	82.9	
	母子世帯	35	16.7	
	父子世帯	1	0.5	

表２　自己肯定感尺度の生成（主因子法）

No.	項目	F1	M	SD
7	ありのままの自分が好きだ	.753	2.980	.729
5	むずかしいことにもくじけずがんばれる	.735	3.310	.859
4	自分はやればできる人間だと思う	.699	2.600	.906
3	今の自分を気に入っている	.682	3.060	.888
8	他の人に自慢できることがある	.652	2.860	.914
2	自分のことをわかってくれている人がいる	.598	3.420	.836
1	やると決めたことは最後までやり通す	.549	2.850	.923
6	なんでも話せる友だちがいる	.497	3.000	1.019
	寄与率	49.300		

表３　自己肯定感尺度得点の比較（学年・性別）

	全体（n=208）		男子（n=87）		女子（n=121）	
	M	SD	M	SD	M	SD
１年（n=61）	25.070	4.813	24.310	3.860	25.630	5.400
２年（n=78）	23.330	5.340	24.220	4.650	22.720	5.740
３年（n=69）	24.040	4.580	24.210	4.560	23.930	4.650
全体	24.080	4.970	24.240	4.350	23.960	5.390

有意差なし

いて話す」（p ＜ 0.10）は有意な傾向が認められた。

最も影響が大きかった項目は「学校の勉強ができるほうか」であり，自由度調整済決定係数は 0.473 であった。それぞれの独立変数の平均値と従属変数への標準偏回帰係数を表 4 に示す。

Ⅳ．考　　察

本研究では，中学生の自己肯定感について，文化資本・社会関係資本を含む家庭生活・学校生活との関連において，その規定要因を量的調査により明らかにすることを試みた。

今回，対象となった中学生の自己肯定感得点は，論理的中間値（20 点）を上回っており，岩永らが実施した調査結果と比較しても同程度であると判断できた。

自己肯定感と家庭生活の関係では，家庭における行動様式である食事に対する考え方が自己肯定感尺度と有意な関連を示した。千須和・北辺・春木（2014）は，夕食を楽しいと感じている者ほどセルフエスティームが高いことを明らかにしている[13]。本研究の結果は，この先行研究を支持するものであり，家庭での食事に関する態度が自己肯定感に影響を及ぼす可能性があることを示唆している。松井（2017）は，前述した通り「教育等を通して自己肯定感を高めることが何よりも重要な課題」であると指摘している[5]。本研究の結果からは，食習慣をはぐくむ，いわゆる「食育」の重要性も示唆された。

また，家族と社会の出来事について話すこと，悩みを抱えたときに母を相談相手としていた場合，自己肯定感尺度と有意な関連傾向を示した。家族との会話をはじめとした接触時間がより多いほど，また家族による「支持的な関わり」（大島 2013）が自己肯定感に良い影響を及ぼす可能性が考えられた[14]。その一方で，「母親の自尊感情と子どもの自尊感情の関連性は高く，非常に密接な関わりを持っているといえる」（田所・大塚 2015）との指摘もあることから，本研究における保護者の回答データとの関連も検討することが必要である[15]。

自己肯定感と学校生活との関連では，友人関係と学業成績の主観的評価が自己肯定感尺度と有意な関連を示した。このことに関して，松岡・押澤（2001）は，中学生を対象とした調査において，自尊感情を高める要因の一つとして，重要な他者である「友人」から信頼され，共感性が高いことをあげている[16]。また，岩井・小田（1986）は，同じく中学生を対象とした調査結果から，友人関係や家族関係が学業成績よりも自尊感情に関連があることを明らかにしていることから，さらに分析を進めていく必要がある[17]。

これらの研究結果は，家庭生活や学校生活での諸場面において，中学生自身が持つ文化資本や社会関係資本が自己肯定感に関連している可能性を示したと言える。ブルデューは，社会階層が趣味などの文化活動に影響し，それが文化資本として教育達成や職業達成を促した結果，社会階層が文化資本をとおして再生産されると述べている（Bourdieu and Passeron 1970）[18]。つまり，阿部が指摘した通り，中学生の自己肯定感は階層性を帯びている可能性も否定できない。

本研究の限界としては，調査で得られたサンプルが一般的なサンプルと比較して偏りがある可能性が高いことである。200 人を超えるデータを分析しているが，同時に調査を実施した保護者の回答を見ると，世帯収入が全国よりも高くなっており，このことが潜在的なバイアスとなっている可能性を否定できない。

表 4　重回帰分析結果

	平均値	標準偏差	β	p
説明変数				
食事の時間を楽しいと思う（1－4）	3.480	.749	.068	
自分の家では食事を大切に考えている（ダミー）	.870	.333	.128	＊
家族で社会の出来事について話す（1－4）	3.080	.905	.112	†
友だちとの関係がうまくいっている（1－4）	3.690	.531	.224	＊＊＊
学校の勉強ができる方か（1－3）	1.950	.675	.316	＊＊＊
わかってくれると思う人いない（ダミー）	.090	.289	－.056	
（悩みや心配）性格のこと（ダミー）	.210	.406	－.233	＊＊＊
（相談する人）母（ダミー）	.720	.452	.114	†
（安心していられるところ）家で家族と過ごす部屋（ダミー）	.570	.496	.065	
自由度調整済み決定係数			.473	＊＊＊

従属変数：自己肯定感得点
†：p ＜ .10，＊：p ＜ .05，＊＊：p ＜ 01，＊＊＊：p ＜ .001

また，本研究のデータからは，自己肯定感の性差は認められなかったが，子どもを対象とした自己肯定感研究では，自己肯定感と性別には有意な関連が認められている一方，松岡・押澤は「社会の変化に伴って，徐々に自尊感情の性差による違いが見られなくなる」可能性があることを指摘しており，継続的な調査が必要である[19]。

注および引用文献

1）日本財団：「家庭の経済格差と子どもの認知・非認知能力格差の関係分析」，2018（https://www.nippon-foundation.or.jp/news/articles/2018/img/6/1.pdf,2018.9.16）

2）加藤悠・中島美那：「母親の自尊感情と養育態度」『茨城キリスト教大学紀要』，45，119-129，2011.

3）内閣府：「第２部第１章１（1）　自分についてのイメージ」『我が国と諸外国の若者の意識に関する調査（平成 25 年度）』，6，2014（https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/thinking/h25/pdf/b2_1.pdf,2018.12.11）

4）国立青少年教育振興機構：「９　自分について」『高校生の生活と意識に関する調査報告書』，35，2015（http://www.niye.go.jp/kanri/upload/editor/98/File/12.9.pdf,2018.12.11）

5）松井香奈：小学校における自己肯定感を高める教育実践の検討：実践研究論文を手がかりとして，教育学研究論集（12），p.47，2017.

6）阿部彩：「子どもの自己肯定感の規定要因」埋橋孝文・矢野裕俊編著『子どもの貧困／不利／困難を考える－理論的アプローチと各国の取り組み』ミネルヴァ書房，93，2015.

7）郭芳・田中弘美・任セア・史邁：子どもの自己肯定感に及ぼす影響要因に関する実証研究：京都子ども調査をもとに，評論・社会科学（126），17，2018.

8）郭芳・田中弘美・任セア・史邁：前掲論文，29，2018.

9）ベネッセ教育研究開発センター：第２回子ども生活実態基本調査報告書，148，2010（https://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/kodomoseikatu_data/2009/pdf/data_12.pdf,2018.12.18）

10）お茶の水女子大学 JELS：『青少年期から成人期への移行についての追跡的研究　JELS 第１集　2003 年基礎年次調査報告（児童・生徒質問紙調査）』，99，2004（http://www.li.ocha.ac.jp/ug/hss/edusci/mimizuka/JELS_HP/bao_gao_shulun_wen_files/JELSreport_1.pdf,2018.12.18）

11）内閣府：低年齢少年の生活と意識に関する調査，2007（https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/teinenrei2/zenbun/index.html,2018.12.18）

12）岩永定・柏木智子・芝山明義・藤岡泰子・橋本洋治：「子どもの自己肯定意識の実態とその規定要因に関する研究」『熊本大学教育学部紀要』，62，104，2013.

13）千須和直美・北辺悠希・春木敏：中学生の家庭における共食とボディイメージ，ダイエット行動，セルフエスティームとの関連，栄養学雑誌　72（3），126-136，2014.

14）大島聖美：「夫婦の信頼感と両親からの支持的関わりが若者の心理的健康に与える影響の男女差」『発達心理学研究』，24，55-65，2013.

15）田所摂寿・大塚周：「母親の自尊感情からみた親子関係の質に関する研究：愛着の形成に焦点を当てて」『作大論集』，5，295-309，2015.

16）松岡英子・押澤由記：「中学生の自尊感情を規定する要因－学校生活要因を中心に－」『信州大学教育学部紀要』，104，139-140，2001.

17）岩井勇児・小田昌世：「中学生の自尊心と学業成績の評定」『愛知教育大学研究報告（教育科学編）』，35，85-97，1986.

18）Bourdieu, P. and Passeron, J. C.: 1970, La Reproduction =1991. 宮島喬（訳）『再生産』藤原書店.

19）松岡英子・押澤由記：前掲論文，141，2001.